



残像

人は、
いなくなってから
場に現れる。

扉が閉まり、
声が消え、
足音も遠ざかったあと。

それでも、
場はすぐには戻らない。

何かが残っているわけではない。
ただ、さっきまでとは
空気の張りが違う。

残像は、
思い出ではない。

好印象でも、
余韻でもない。

「あの人、よかったね」と言える頃には、
もう別のものになっている。

言葉になる前に、
場のほうが先に変わっている。

人が去ったあとに残るのは、
言葉ではない。

視線の高さ。
呼吸の速さ。
沈黙の張り。

その人がいたあいだ、
場に何が足され、
何が増えなかったか。

輪郭は、
去ったあとに見える。

強くいた人が、
深く残るとは限らない。

むしろ、
何かを置いていった人ほど、
場はすぐに閉じる。

何も持ち込まず、
何かを奪わず、
ただそこにいた人だけが、

いなくなったあと、
空気の調子を変えている。

残ったのは、
不在のかたちだった。

Edition — 存在の芯
別景：残存

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026